

田 屋 遺 跡

—大和紀伊平野農業水利事業に伴う発掘調査報告書—

2013 年 2 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序 文

和歌山県の北部を西流する紀ノ川流域は、古くから絶えることなく人々が生活を営み続けてきました。なかでも、下流域に形成された肥沃で広大な沖積平野では、貴重な埋蔵文化財が多数発見されており、弥生時代から古墳時代の遺跡が密集する地域であります。また、条里遺構も多く確認されており、連綿と生活が営まれていたことを物語っています。

本書に収めた田屋遺跡は、弥生時代から鎌倉時代にかけて紀ノ川北岸を拠点とした人々の集落跡です。これまでの発掘調査では、60棟以上の竪穴建物や掘立柱建物、自然流路などが確認されています。今回の調査では、鎌倉時代を中心とする、溝や柱列など多数の遺構が検出されました。ここにその成果を報告します。

これらの調査成果が郷土の歴史を知るための一資料となり、埋蔵文化財への認識を深め関心をもっていただく一助となることを願っております。

最後になりましたが、本事業の推進にあたり、ご指導、ご支援を賜りました関係者各位ならびに関係機関の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成25年 2 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター
理 事 長 森 郁 夫

例 言

1. 本書は、大和紀伊平野農業水利事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 本事業のうち発掘調査は、近畿農政局紀伊平野農業水利事業建設所の委託事業として、和歌山県教育委員会の指導のもと発掘調査を平成 24 年 11 月 2 日から平成 24 年 11 月 30 日まで、また出土遺物整理業務を平成 24 年 12 月 3 日から平成 24 年 1 月 25 日までの期間で公益財団法人和歌山県文化財センターが行った。
3. 発掘調査及び報告書刊行に係る体制は下記の通りである。

発掘調査及び出土遺物整理業務

事務局長・管理課長	渋谷 高秀
埋蔵文化財課長	村田 弘
発掘調査・出土遺物整理担当	森原 聖

4. 本事業の遂行に当り近畿農政局紀伊平野農業水利事業建設所並びに地元自治会、地域の方々から多大な援助を受けた。ここに記して感謝の意を表します。
5. 出土遺物は和歌山県教育委員会が保管し、発掘調査・出土遺物整理で作成した実測図・写真・デジタルデータ・台帳などの記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが保管している。

凡 例

1. 遺構等の土層注記に記載した土色及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』(2005 年版)に基づいた。
2. 調査の際の平面座標基準は、世界測地系平面直角座標 VI 系に準拠し、標高値は T. P. (東京湾平均海面) を用いた。
3. 本書に掲載した遺構図版縮尺は、全体図が 1/350、個別遺構平面図・断面図が 1/30、1/60、1/80、基本土層柱状図が 1/20 として掲載した。
4. 本書に掲載した遺物図版縮尺は、土器・石製品を 1/4 として掲載した。
5. 遺構番号は基本的に発掘調査時の登録番号を踏襲した。遺構の検出順に 1 から通し番号を付しており、「遺構の種類－遺構番号」と表記した。ただし、遺構番号の煩雑な場合は、便宜的に「柱列 1」のように遺構名で表記した。
6. 遺物番号は、出土遺物観察表・遺物写真図版の遺物番号と一致する。
7. 本書掲載地図は、和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』(平成 23 年度版)と、都市計画基図をそれぞれ加筆し使用した。

本文目次

序文、例言・凡例

第1章	調査の経緯と経過	1
第2章	位置と環境	2
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第3節	既往の調査	4
第3章	調査の方法	5
第4章	基本層序	6
第5章	調査の成果	9
第1節	第1遺構面	9
第2節	第2遺構面	12
	(1) 平安時代後期から鎌倉時代の遺構	12
	(2) 弥生時代の遺構	14
第3節	出土遺物	15
	(1) 平安時代後期から鎌倉時代の遺物	15
	(2) 弥生時代の遺物	15
	(3) 包含層から出土した遺物	16
第6章	まとめ	16

挿図目次

第1図	調査位置図	1
第2図	田屋遺跡周辺の遺跡分布図	2
第3図	既往の調査位置図	4
第4図	グリッド設定図	5
第5図	基本層序	6
第6図	調査区遺構配置図	7・8
第7図	第1遺構面 個別遺構図(1)	9
第8図	第1遺構面 個別遺構図(2)	11
第9図	第2遺構面 個別遺構図(1)	12
第10図	第2遺構面 個別遺構図(2)	13
第11図	自然流路92	14
第12図	出土遺物実測図(1)	17
第13図	出土遺物実測図(2)	18

表目次

出土遺物観察表	19
---------	----

図版目次

図版1	調査前状況	第2遺構面	溝36
	第1遺構面 中央部全景	第2遺構面	溝76・77・78
	第1遺構面 溝33 上層 遺物出土状況	図版4	第2遺構面 井戸状遺構70
図版2	第1遺構面 溝33 完掘状況		第2遺構面 井戸状遺構88
	第1遺構面 柱列1		第2遺構面 自然流路92
	第1遺構面 柱穴63 遺物出土状況	図版5	出土遺物(1)
図版3	第2遺構面 南側全景	図版6	出土遺物(2)

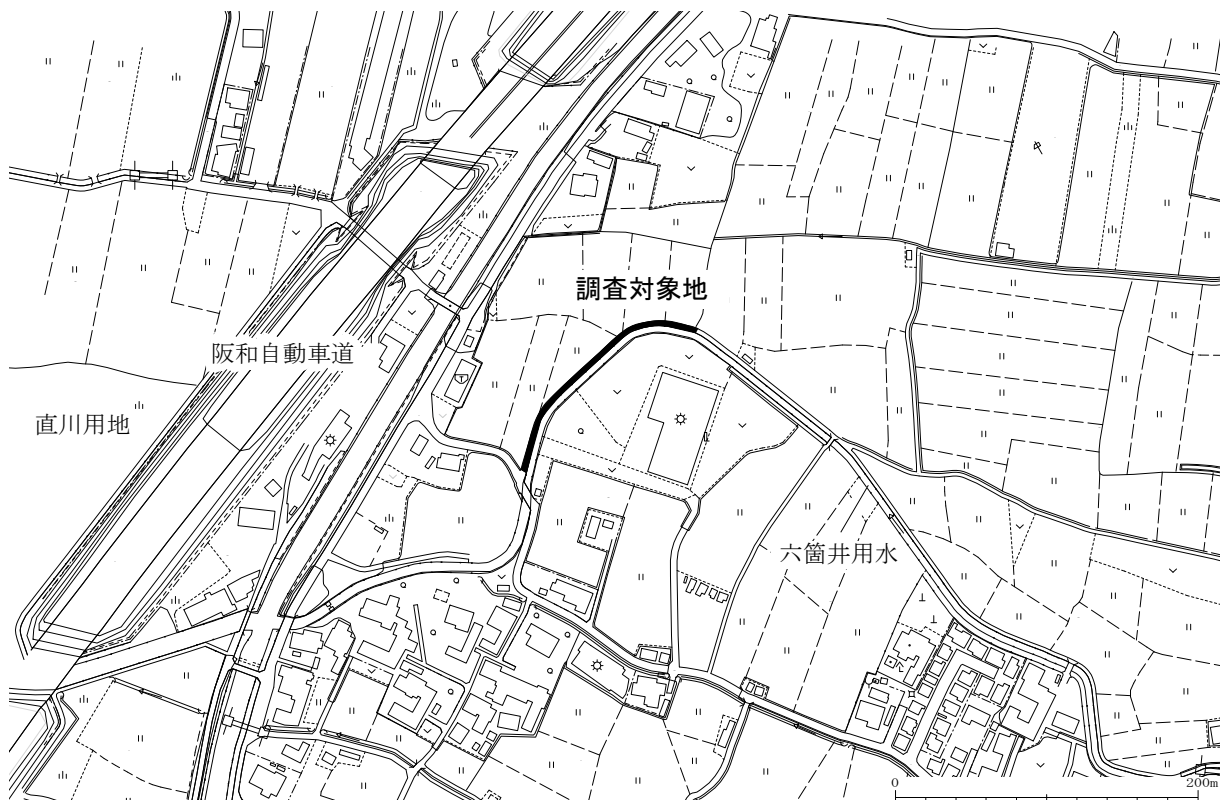
第1章 調査の経緯と経過

今回の発掘調査は、近畿農政局により紀伊平野農業水利事業が計画されたが、その予定地が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である田屋遺跡に該当したため、和歌山県教育委員会で確認調査を実施し、その結果に基づき、埋蔵文化財が展開していると確認された範囲について実施することとなった。調査地は阪和自動車道と紀ノ川が交差する地点の北東約700m、阪和自動車道の東側に位置し、六箇井用水右岸部に相当する。

田屋遺跡は弥生時代から鎌倉時代にかけての集落遺跡であり、その範囲は東西約1km、南北約750mとされている。遺跡の東端は弥生時代から室町時代の集落跡である西田井遺跡と接している。調査地周辺における過去の調査では、平成17年に阪和自動車道の西側一帯において財団法人和歌山市文化体育振興事業団が六箇井用水の北及び南側を対象に埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した。その結果、六箇井用水の南側一帯は紀ノ川の氾濫原であり、北側は直川用地内において奈良時代から平安時代の溝や自然流路が検出されている。この調査結果をもとに、和歌山県教育委員会は田屋遺跡西端の一部範囲変更を行っている。

その後、平成20年に和歌山市教育委員会が、平成21年に財団法人和歌山市都市整備公社が直川用地内の調査を実施し、古墳時代から平安時代の遺構を検出している。平成22・23年には直川用地公共的施設区画道路の整備に伴い、財団法人和歌山市都市整備公社が用地北側の調査を実施している。その結果、古墳時代初頭から前期の竪穴建物、溝などの遺構を検出している。

今回の調査は、近畿農政局紀伊平野農業水利事業建設所から委託を受けて和歌山県教育委員会の指導のもと、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。現地調査期間は平成24年11月2日から平成24年11月30日である。



第1図 調査位置図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

和歌山市は和歌山県の北西隅に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市に、東は和歌山県岩出市及び紀の川市に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川が本市中央を流れ、紀伊水道に注いでおり、その過程で運ばれた土砂によって和歌山平野が形成されている。

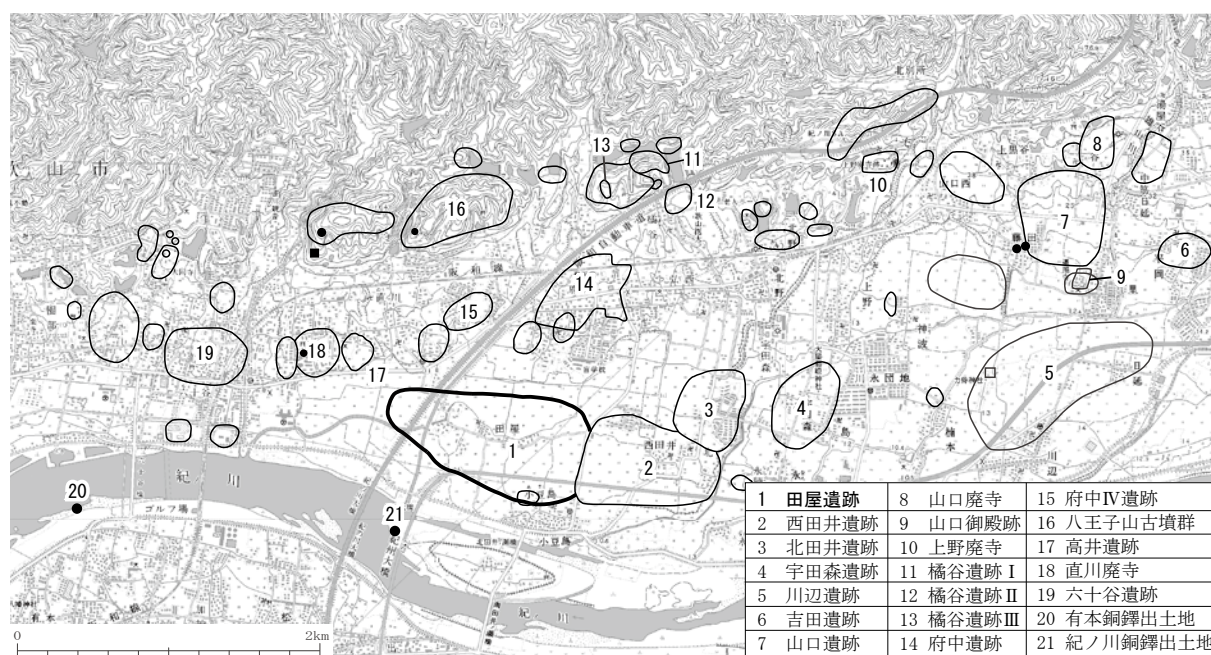
紀ノ川の河口域に広がる標高 15 m 以下の低地に位置する和歌山平野には、旧河道が無数に分布し、これらの旧河道は、宮井・六箇井などの灌漑用水に利用されている。島状に分布する自然堤防には、松島・中之島・福島など「島」が付いた地名が残っている。

田屋遺跡は、紀ノ川の河口から約 9km 遡った北岸の和歌山市田屋に所在し、標高約 6.0 m を測る沖積地に立地している。現在の田屋集落と紀の川の間位置し、微高地から一段下がった後背地の氾濫原にあたる。

本調査地の南をながれる六箇井用水は、古墳時代から知られる宮井用水と同様に、古くから紀ノ川下流の和歌山平野南岸と北岸を潤していた。起源は不明であるが、中世の根来寺と日前宮の水論として古い歴史をもつ。江戸時代に入り本格的に井堰が整備されるようになり、元禄 10 年（1697）伊都郡学問路村の大庄屋・大畑才蔵が測量し、元禄 14 年（1701）に延長したと「才蔵日記」に記されている。さらに、文化 2 年（1805）中村成近、天保 6 年 10 月（1835）大庄屋・木村清兵衛らの手により、現在の用水路に近い形となっている。

第2節 歴史的環境

田屋遺跡が所在する紀ノ川北岸には、縄文時代から江戸時代までの遺跡が多数存在し、長期間に渡り人々の生活の場であったことがわかる。以下に田屋遺跡周辺の遺跡を記述する。



第2図 田屋遺跡周辺の遺跡分布図

縄文時代 川辺遺跡では縄文時代後期から晩期の竪穴住居や土器棺墓の他、多数の土器が出土している。また和泉山脈南麓の標高約 12 mを測る段丘上には、縄文時代のものとみられるサヌカイト製の凹基式打製石鏃が出土した高井遺跡や、和泉山脈から南に広がる扇状地端部に立地する六十谷遺跡では、縄文時代晩期の土器が出土している。

弥生時代 六十谷遺跡において弥生時代前期の土器や石器が採集されている。平野部の微高地上には、吉田遺跡、川辺遺跡、宇田森遺跡、北田井遺跡、西田井遺跡など弥生時代中期以降に集落遺跡が営まれるようになる。当遺跡の東約 8km にある吉田遺跡では、中期の方形周溝墓、中期から後期の竪穴住居や壺棺などが確認されている。川辺遺跡では、楕円状を呈する炉の長軸方向の端部に 2 つのピットをもつ松菊里型と考えられる竪穴住居が 2 棟確認されている。また、紀ノ川の中州において突線紐式袈裟襷文銅鐸が出土している。

古墳時代 弥生時代から継続して平野部に営まれる吉田遺跡、北田井遺跡、西田井遺跡などがあり、吉田遺跡では古墳時代前期の一辺約 7 mを測る大型の竪穴住居が確認されている。府中 IV 遺跡は標高約 20 mの段丘上に集落が形成され、確認された一辺が 8.6 mを測る大型住居は吉田遺跡と同様に注目すべき遺構である。

古墳の築造は、古墳時代前期後半から丘陵上に築造され、六十谷古墳群、八王子山古墳群などがある。六十谷古墳群では、古墳時代前期後半から中期にかけての円筒埴輪の他、形象埴輪が確認されている。西方約 4.5km には、馬冑や馬甲など朝鮮半島との深い繋がりを示す遺物が出土した大谷古墳が存在している。全長 67 mを測る前方後円墳で、多数の副葬品が出土していることから、紀ノ川流域で強い権力を持った人物の墓として注目されている。平野部では古墳時代後期になって北田井 1 号墳が築造されている。北田井遺跡内に築造されており、集落とその墓域との関連を示す貴重な例と考えられる。

奈良時代 府中遺跡、吉田遺跡、山口遺跡、川辺遺跡などの遺跡がある。田屋遺跡の北側、和泉山脈南麓を東西に走る県道粉河・加太線が南海道と推定されており、その沿線に古代寺院や国府に関連すると考えられる遺跡が立地している。南海道は延暦 13 年（794）の平安京遷都以前は、平城京と、以後は平安京と紀伊・淡路・阿波・讃岐・土佐を結ぶ官道で、大和から国境の真土山を越えて紀伊国に入り、紀ノ川右岸を西進して萩原駅（かつらぎ町）から名草駅・加太駅（和歌山市）に至り、ここから海路淡路に渡るコースをとる。平安京遷都以後南海道は新たなルートに改変されたことは、延暦 15 年（796）に『日本後期』に記されている。府中遺跡では遺構は確認されていないが、地名から国府が置かれていたと考えられている。吉田遺跡で確認された掘立柱建物は南海道名草駅との関連が指摘されている。上野廃寺は薬師寺式の伽藍配置で東西に塔を備えている。

平安時代 周辺の平安時代以降の様相は明確ではないが、西田井遺跡において後期以降、集落がみられるようになってくる。川辺遺跡では条里遺構や集落が確認されている。

鎌倉・室町時代 高井遺跡・北田井遺跡・宇田森遺跡・川辺遺跡などの遺跡がある。高井遺跡では掘立柱建物や北宋銭 15 枚が副葬された土葬墓が確認されている。平野部の西田井遺跡では掘立柱建物群・井戸・池泉などが「コ」の字状の溝により区画された屋敷地が検出されている。

江戸時代 田屋遺跡の西約 4km に紀州藩徳川家の別邸として「紀伊国名所図会」に記された山口御殿跡がある。土塀基礎や礎石建物が検出されている。

第3節 既往の調査

田屋遺跡の発掘調査はこれまで県関係で第1次から第10次まで、市関係で第1次から第6次まで実施されている。

県第1次から第5次調査は一般国道24号線（和歌山バイパス）建設工事に伴う発掘調査で、昭和56年から昭和61年までを社団法人和歌山県文化財研究会が、昭和62年から平成元年までを財団法人和歌山県文化財センターが実施している。これらの調査では、縄文時代晩期後葉の土坑、弥生時代後期から古墳時代後期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・自然流路を、中世の掘立柱建物跡や溝を検出している。

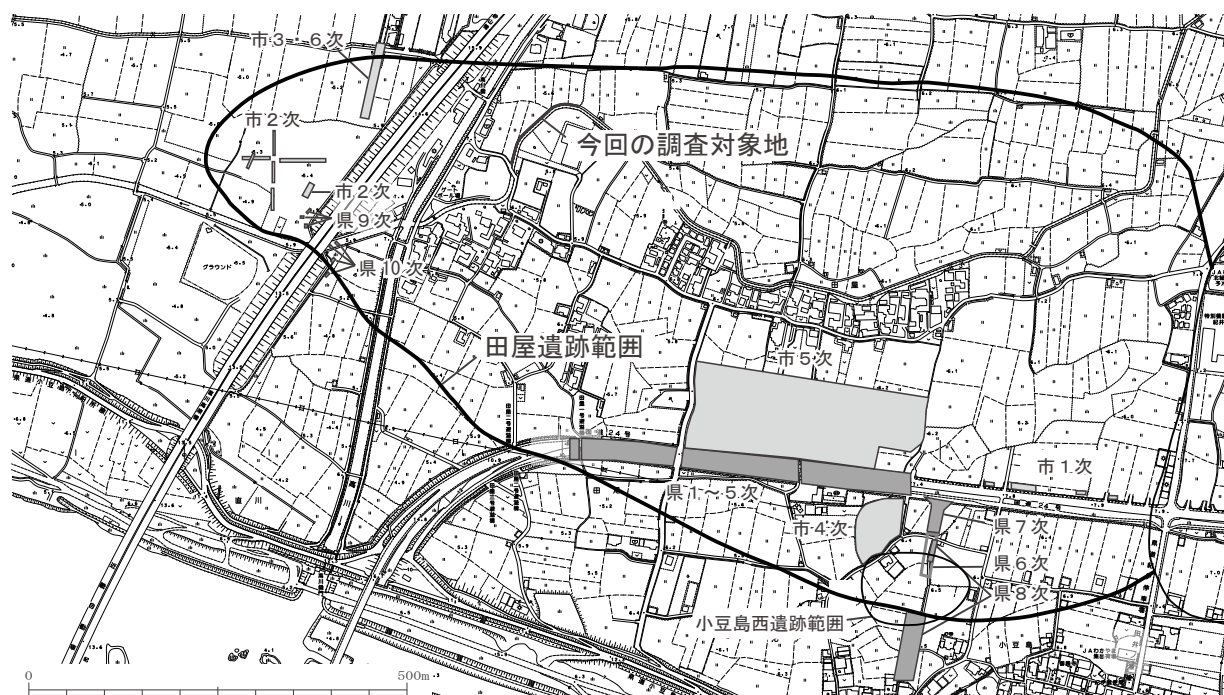
県第6次から第8次調査は、県道紀伊停車場田井ノ瀬線改良工事に伴う発掘調査とそれに先立つ道路擁壁工事に伴い調査され、第6次調査を平成14年に和歌山県教育委員会が、第7次・第8次調査を平成13年から15年に財団法人和歌山県文化財センターが実施している。これらの調査では、古墳時代の竪穴建物状遺構、奈良時代から平安時代にかけての溝・流路、中世の水田遺構と畦畔状遺構や寺院関係の区画溝・礎石建物・井戸などを検出している。また江戸時代末頃の多数の溝や、柱穴・土坑などを検出している。

県9・10次調査はそれぞれ平成19・20年に確認調査として実施している。調査では、遺構は検出されず、土師器が出土したのみである。

市第1次は大規模店舗建設に伴う発掘調査で、平成16年に財団法人和歌山市文化体育振興事業団が実施している。調査では、古墳時代の水田遺跡・畦畔・溝を検出している。

市第2次は公共施設建設に伴う発掘調査で、平成21年に財団法人和歌山市都市整備公社が実施している。調査では、古墳時代の溝・掘立柱建物、平安時代の溝などを検出している。

市第3次は直川用地公共的施設区画道路の整備に伴い、平成21年に財団法人和歌山市都市整備公社が実施している。調査では古墳時代の竪穴建物・溝などを検出している。



第3図 既往の調査位置図

市第4次は集合住宅建設に伴う確認調査で、平成22年に和歌山市教育委員会が実施している。この調査では中世の土師器を含む包含層を検出したのみである。

市第5次は大規模店舗建設に伴う確認調査で、平成22年に財団法人和歌山市都市整備公社が実施している。調査では、古墳時代の溝・土坑や県第1次から第5次調査で確認された自然流路が検出されている。

市第6次は直川用地公共的施設区画道路の整備に伴う発掘調査で、平成22年から平成23年に財団法人和歌山市都市整備公社が実施している。調査では、古墳時代初頭から前期の竪穴建物・溝・土坑・ピットなど多数の遺構を検出している。

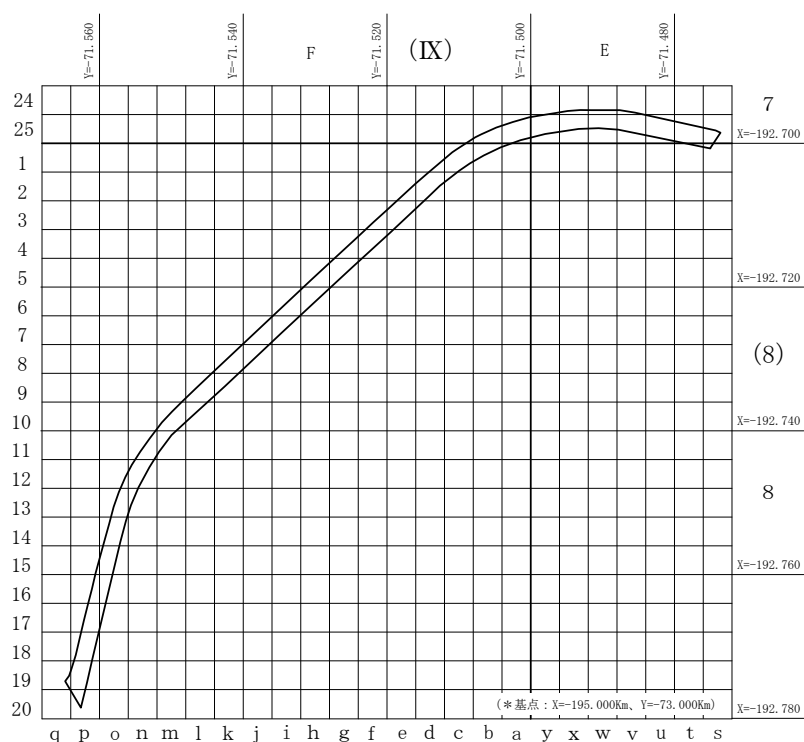
第3章 調査の方法

今回の調査計画面積は360㎡である。調査対象地は、南側の六箇井用水路と北側の田圃擁壁の間約1.6m、長さ約130mの細長い箇所であり、擁壁を保護するため控えをとり、調査面積333㎡を対象に調査を実施した。

表土掘削作業はバックホーで第Ⅰ層の表土、第Ⅱ層の現代盛土、第Ⅲ層現代及び近世以降の旧耕作土を併せて行った。

バックホーによる表土掘削後、人力により第Ⅲ層残存土の掘削を行い、遺物包含層である第Ⅳ層面で遺構検出を行った。第Ⅳ層面で遺構の掘削、図面・写真の記録作業を行った後、第Ⅳ層を人力により掘削し、地山である第Ⅵ層上面で調査を行った。第Ⅴ層は試掘トレンチ内でのみ確認されている。

表土掘削終了後に4m間隔のグリッドを表す杭を打設し基準とした。グリッドはY－63.000、X－185.000を基準とする1km四方の大区画、100m四方の中区画、4m四方の小区



第4図 グリッド設定図

画を設定した。

本調査地は大区画Ⅸ－8、中区画E－7・8、F－7・8に位置している。小区画は東西方向をY軸、南北方向をX軸とし、Y軸は東から西へa、b・・・と、X軸は北から南へ1、2・・・と府番した。出土した遺物はグリッド、遺構ごとに取り上げた。図面実測はそれぞれの調査面、個別の遺構に関して、縮尺1/10・1/20の平面図、断面図を実測した。写真撮影は、写真用足場により各遺構面で全景写真撮影を、調査の過程で個別遺構の撮影を行った。

第4章 基本層序

第Ⅰ層 表土である。本調査区は調査直前まで農道であり、敷設のために整地されている。

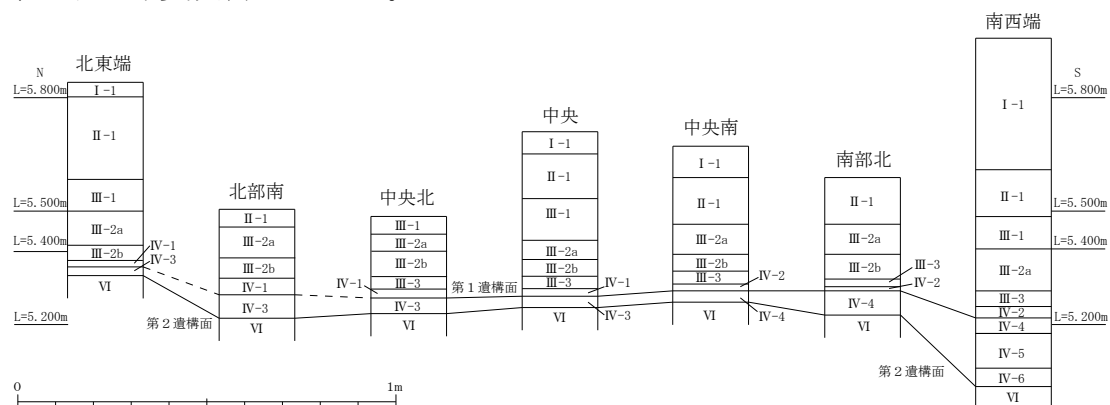
第Ⅱ層 北西側の田圃側擁壁と南東側の用水路を施工する際に掘削し埋め戻された盛土である。コンクリート殻が混在している。

第Ⅲ層 現代及び近世以降の旧耕作土で、土色等から概ね3層に分層した。1層は現代の耕作土である。2層は近世以降の旧耕作土であり2a・2b層に細分した。土色等は類似しており、どちらの層にも下位に鉄分の沈着が確認できるため長期間水の影響を受けていたものと考えられる。3層は鉄分を多く含む層である。

第Ⅳ層 土師器、瓦器を含む遺物包含層である。第Ⅲ層に比べマンガンを多く含んでおり、調査区の南側により厚く堆積している。土色等から概ね6層に分層した。1層はマンガンを多量に含む層であり、調査区の中央から北に堆積している。2層は主に調査区の中央から南にかけて1層に変わり堆積している。マンガンを比較的多く含んでいる。3層は調査区の南を除きほぼ全域で確認できる。4層は中央から南にかけて3層に変わり堆積している。調査区の中央から西側にかけて3層及び4層上面で遺構が検出でき、溝、土坑、ピット等を検出した。

第Ⅴ層 自然堆積層である。本調査区の北から2箇所目の確認調査及び調査区外の水路左岸、下流の確認調査でも堆積している。いずれも遺構は確認されていない箇所であり、本調査区では旧用水路内の堆積であった。

第Ⅵ層 調査区全域で確認できる地山である。調査区北端が最も標高は高く、中央にかけて約0.10m下がる。調査区の南端から南方向に緩やかに下降すると推測される。遺構の希薄な北側は傾斜地にあたり、密度の高い中央部は比較的平坦な場所である。遺構は、溝、井戸状遺構、土坑、ピット等多数確認している。



第5図 基本層序

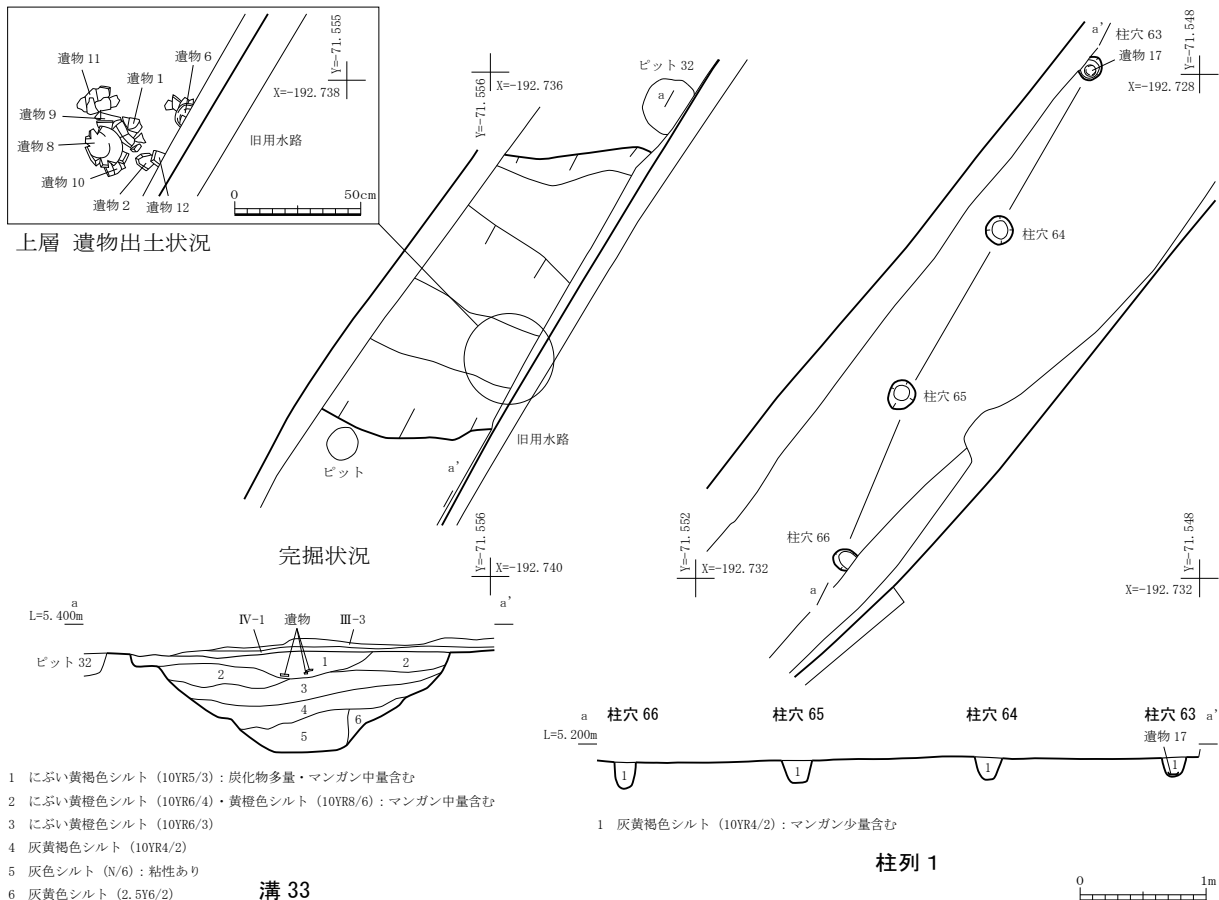
第5章 調査の成果

検出した遺構は、検出層位により、第Ⅳ－3・4層上面を第1遺構面、第Ⅵ層上面を第2遺構面とする。それぞれの遺構面で検出した遺構からは、土師器や瓦器が出土しており、12世紀後半から13世紀に帰属する遺構であると考えられる。また、第2遺構面の調査区中央部において弥生時代の自然流路と推測される遺構を検出しており、弥生時代から古墳時代の包含層は残存していないものと考えられる。

第1節 第1遺構面

第Ⅳ－3層及び4層で検出した遺構は溝1条、柱列1列、土坑15基、ピット20基である。第Ⅵ層上面で検出されたが、明らかに第1遺構面の遺構であると確認された遺構も含む。

溝33 調査区の中央南側で検出し、軸はN－65°－Wである。南東側は旧用水路により削平を受けており、残存規模は延長1.12m、幅2.25m、深さ0.8mである。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形はU字状を呈する。堆積は6層に分かれ、いずれもシルトである。下位の5・6層は灰色の粘性のあるシルトで自然堆積層と考えられる。1層は炭化物を多量に含み、多くの遺物が出土している。また周辺で検出された土坑、ピットからも炭化物を多量に含む埋土が確認されており、火災の後の片付け跡の可能性も考えられる。遺物は土師器、瓦器が大半を占め、土師器皿（1・2）・小皿（3～5）、瓦器小皿（6、7）・椀（8～13）、土師器土釜（14～16）の他、須恵器、瓦が出土している。



第7図 第1遺構面 個別遺構図(1)

柱列 1（柱穴 63 ～柱穴 66） 調査区の中央南側で検出され、軸はN－25°－Eである。調査区が狭小なため、検出された柱列は1列のみで柱穴4基を確認した。柱間は1.4～1.5 mである。北東の柱穴63は調査区の境で検出され、南西の柱穴66は攪乱により削平を受けているため、それらの規模は不確かであるが、いずれも直径約0.2 m、深さ約0.2 mと小規模であると推察される。堆積は単一層である。遺物は土師器、瓦器が出土しており、柱穴63の底部からは土師器小皿（17）が正位置で出土しており、意図的に埋められた可能性も考えられる。

土坑 12 調査区の中央北側で検出した。東側は旧用水路により削平されており、残存規模は長軸0.60 m、短軸0.22 m、深さ0.04 mと極めて浅く、上位は削平を受けていると考えられる。堆積は単一層である。遺物は検出面から土師器小皿（18・19）が出土している。

土坑 27 調査区の中央で検出され、南東側は用水路で削平されている。形状は隅丸方形で残存規模は長軸2.28 m、短軸0.67 m、深さ0.06～0.17 mである。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は中央部が高い。遺物は瓦器、須恵器が出土している。

土坑 28 調査区の中央で検出した。形状は不整楕円形で長軸1.50 m、短軸0.50 m、深さ0.05 mである。堆積は単一層である。壁面は緩やかに立ち上がる。遺物は瓦器、土師器が出土しており、土師器皿小片は回転糸切りの痕跡がみられる。

土坑 39 調査区の南側で検出し、ピット40の南側に接している。西側は田圃擁壁で削平されている。形状は隅丸方形で、残存規模は長軸0.59 m、短軸0.32 m、深さ0.59 mである。底面は平らで、堆積は2層に分かれる。遺物は土師器、瓦器、須恵器が出土している。

ピット 32 調査区の中央南側で検出され、東側は用水路で削平されている。形状は円形で直径0.44 mと推定され、深さ0.06 mと浅い。底面は平らで、堆積は単一層である。遺物は土師器、瓦器が出土している。

ピット 34 調査区の中央南側で検出し、西側は田圃擁壁で削平されている。形状は円形で直径0.31 mと推定され、深さ0.23 mである。底面はU字状で、堆積は2層に分かれる。中央は柱状に埋土が異なり、炭化物を多く含んでいる。東側に位置する溝33の上層にも炭化物を多く含むため、同時期に埋められた可能性が考えられる。遺物は土師器、瓦器が出土している。

ピット 38 調査区の南側で検出し、西側は田圃擁壁に削平されている。形状は楕円形で、残存規模は長軸0.72 m、短軸0.56 mである。底面は北側が低くなっており、深さは南側で0.25 m、北側で0.48 mである。堆積は2層に分かれる。遺物は土師器、瓦器が出土している。

ピット 40 調査区の南側で検出し、土坑39の北側に接している。西側は田圃擁壁で削平されている。形状は円形で直径0.46 mと推定され、深さ0.45 mである。底面は中央部で柱状に低く、堆積は3層にわかれる。1、2層が3層を切る形で堆積している。遺物は土師器皿（20）瓦器碗（21・22）が出土している。

ピット 43 調査区の南側で検出し、西側は田圃擁壁に削平されている。形状は楕円形で、残存規模は長軸0.60 m、短軸0.39 m、深さ0.40 mである。底面は平らで、堆積は2層に分かれる。遺物は瓦器が出土している。

ピット 48 調査区の南側で検出した。形状は円形で直径0.40 m、深さ0.40 mである。堆積は3層に分かれる。1層は中央に柱状に堆積し、2、3層を切る形で堆積している。遺物は土師器、瓦器が出土している。



第2節 第2遺構面

第VI層上面で検出した遺構は溝6条、井戸状遺構2基、土坑5基、ピット44基、溝状遺構2条、自然流路1条である。第2遺構面で検出された遺構からは第1遺構面同様、瓦器、土師器が出土している。同一面上で検出された自然流路のみ弥生時代の遺物が出土している。弥生時代から古墳時代の遺物包含層は残存しておらず、周辺に同時代の遺構は検出していない。

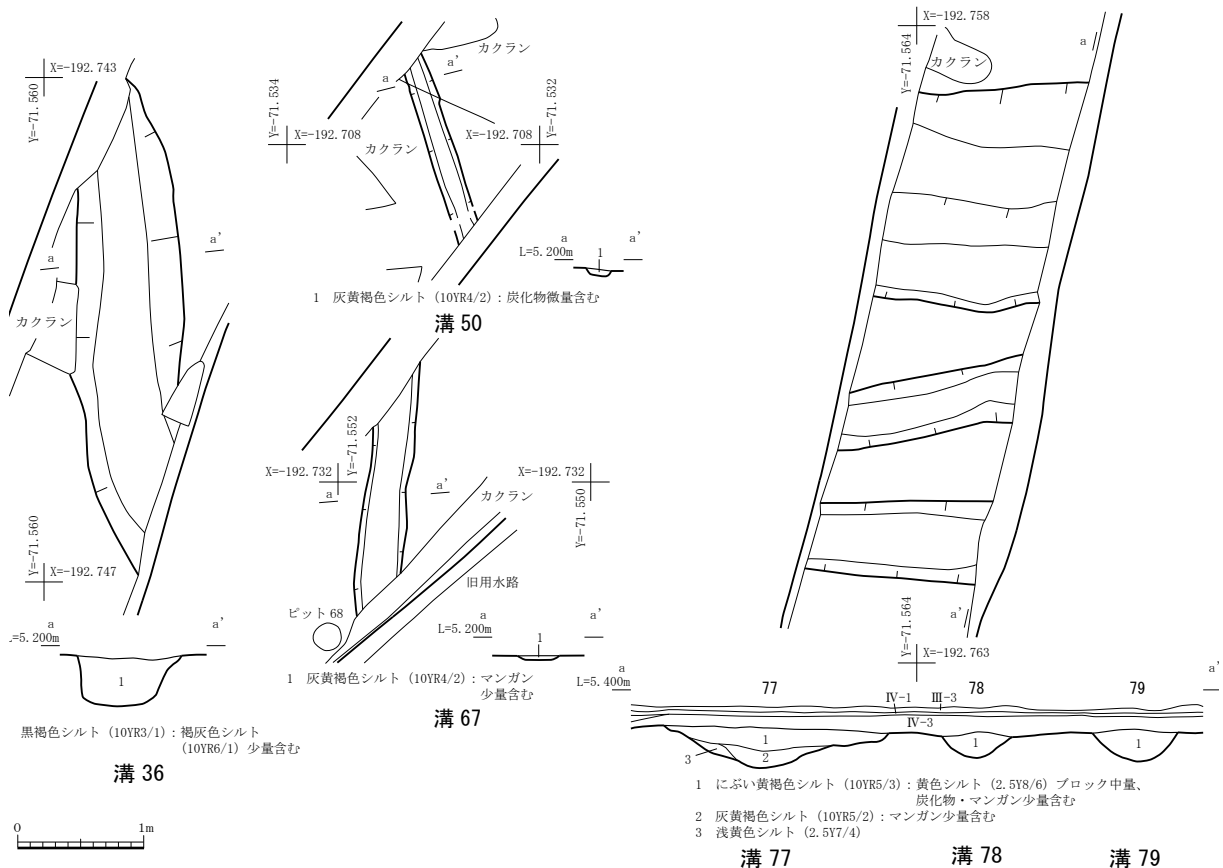
(1) 平安時代後期から鎌倉時代の遺構

溝 36 調査区の中央南側で検出した南北方向の溝である。延長 2.60 m、幅 0.84 m、深さ 0.37 m である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は方形に近く、底面は平坦である。堆積は単一層で、黒褐色のシルトに褐灰色のシルトが少量混ざっている。遺物は出土していない。

溝 50 調査区の中央北側で検出し、軸はN-20°-Wである。南東端は攪乱されており、残存規模は延長 1.20 m、幅 0.5 m、深さ 0.08 mと小規模である。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。堆積は単一層である。遺物は土師器、瓦器が出土している。

溝 67 調査区の中央南側で検出した、南北方向の溝である。南端は攪乱されており、残存規模は延長 1.40 m、幅 0.37 m、深さ 0.03 mと極めて小規模である。堆積は単一層である。遺物は瓦器碗(23)が出土している。

溝 77 調査区の南側で検出した東西方向の溝である。溝 78・79と並行しており、最も北に位置している。規模は延長 1.27 m、幅 1.75 m、深さ 0.31 mである。壁面は緩やかに立ち上がり、南壁は二段階に落ち込んでいる。堆積は3層に分かれ、焼土塊を含んでいる。遺物は土師器、瓦器が出土している。



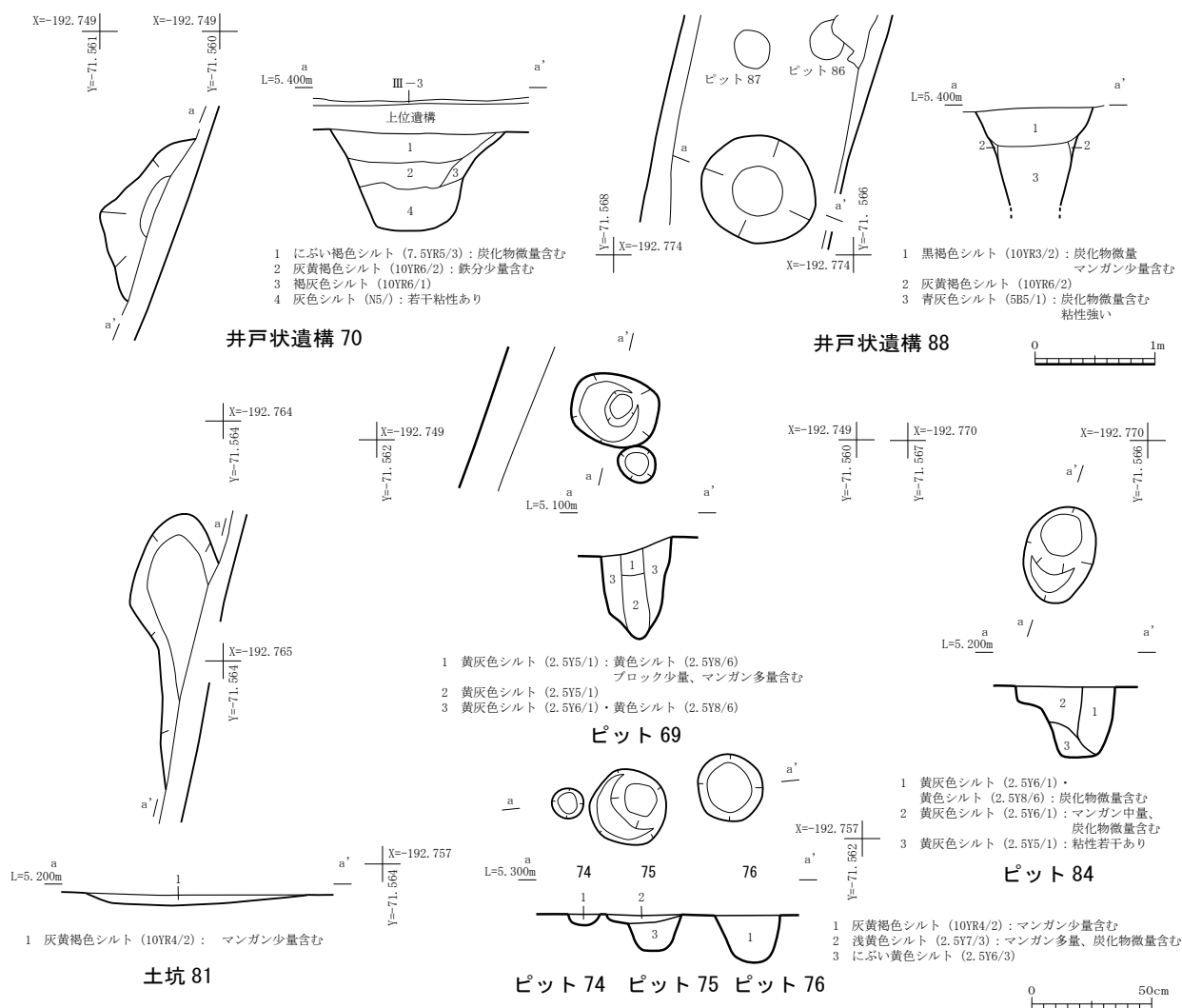
第9図 第2遺構面 個別遺構図(1)

溝 78 溝 77・79 の間に位置し、並行する溝の中で最も規模の小さい溝で、軸方向はN－80°－Eとやや北に振っている。規模は延長 1.35 m、幅 0.46 m、深さ 0.2 m で、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積は単一層である。遺物は土師器、瓦器が出土している。

溝 79 並行する溝 78 の南に位置している。規模は延長 1.35 m、幅 0.61 m、深さ 0.25 m である。壁面は緩やかに立ち上がり。堆積は単一層で、溝 78 と類似している。遺物は土師器皿（24）・小皿（25）、瓦器小皿（26）・椀（27）が出土している。

井戸状遺構 70 調査区の南側で検出し、東側は用水路で削平されている。残存規模は南北 1.47 m、東西 0.43 m、深さ 0.79 m である。形状は第 1 遺構面で検出した広い範囲の凹み部の下位で検出されたため、平面形は不正形である。壁面は急角度で立ち上がり、起伏している。堆積は 4 層に分かれ、下位は灰色のシルトである。遺物は土師器、瓦器が出土している。

井戸状遺構 88 調査区の南端で検出した。形状は、検出面で直径 0.80 × 0.97 m のほぼ円形である。深さ 0.80 m まで掘削したが、内傾して掘削されており、その地点での直径が 0.40 m と狭小であったため、掘削は途中で止め底面は確認していない。下位は、ほぼ垂直に掘削されていると推測される。堆積は 3 層分を確認し、上層は黒褐色のシルト、下層は青灰色の粘性の強いシルトである。上層と下層の境の壁面部分に他とは異なる埋土を確認したため、何らかの設備があった可能性も考えられる。遺物は土師器、瓦器が出土している。



第 10 図 第 2 遺構面 個別遺構図 (2)

土坑 81 調査区の南側で検出され、東側は用水路で削平されている。形状は不整形で、残存規模は長軸 0.45 m、短軸 0.44 m、深さ 0.70 m と極めて浅い。堆積は単一層である。遺物は土師器皿 (28)、土釜が出土している。

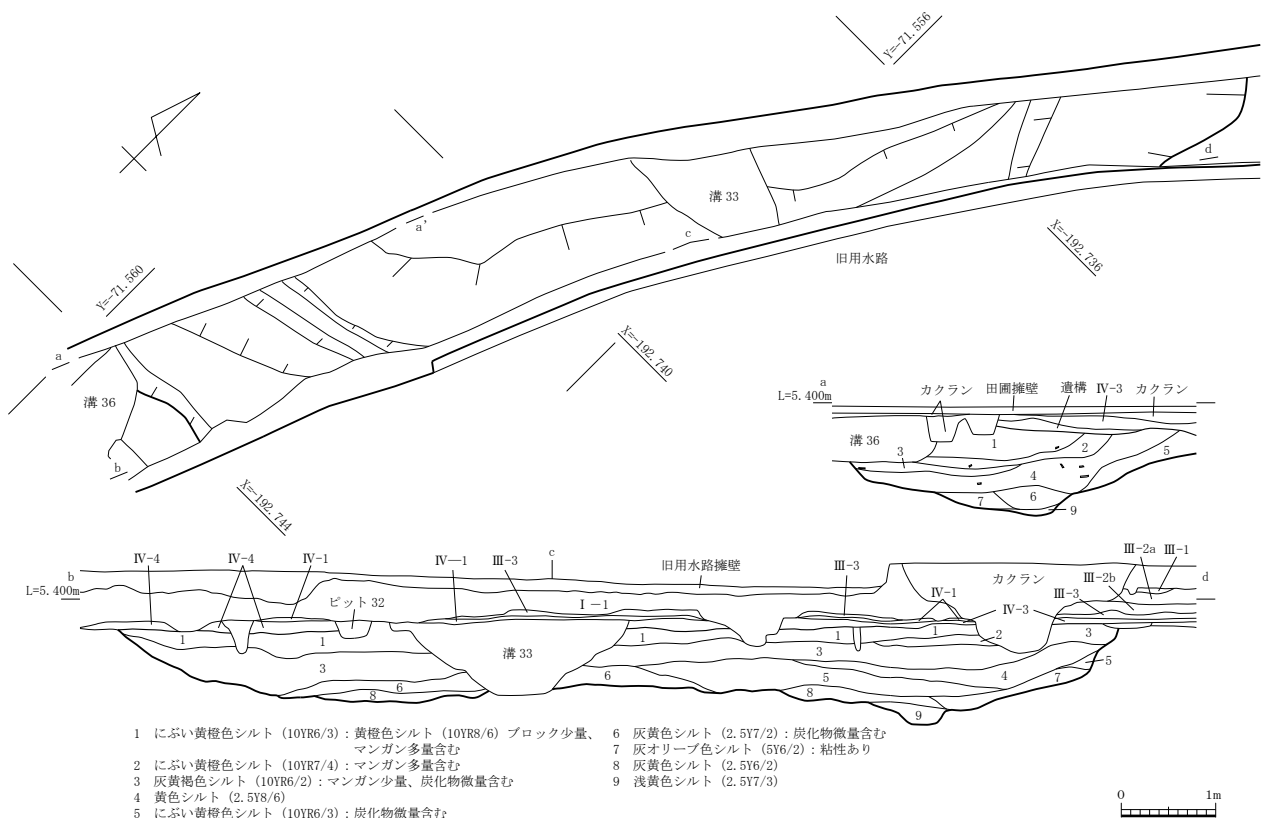
ピット 69 調査区の中央南側で検出された。形状は楕円形で、長軸 0.36 m、短軸 0.29 m、深さ 0.36 m である。底面は U 字状で、堆積は 3 層に分かれる。1、2 層は 3 層を切る形で中央に柱状に堆積している。遺物は土師器が出土している。

ピット 74・75・76 調査区の南側で隣接して検出した。ピット 74 の形状は円形で直径 0.13 m、深さ 0.04 m と小規模である。ピット 75 は中央に位置し、形状は円形で直径 0.31 m である。底面は東側が低くなっており、深さ 0.15 m である。堆積は 2 層に分かれる。ピット 76 の形状は円形で、直径 0.26 m、深さ 0.19 m である。底面は平坦で堆積は単一層である。遺物はピット 75・76 から瓦器が出土している。

ピット 84 調査区の南端で検出した。形状は楕円形で、長軸 0.40 m、短軸 0.29 m である。底面は北側が低くなっており、深さ 0.29 m である。堆積は 3 層に分かれ、1 層が 2、3 層を切る形で堆積している。遺物は出土していない。

(2) 弥生時代の遺構

自然流路 92 調査区の中央部で検出し、南北方向に蛇行していると考えられる。調査区が狭小であるため正確な規模は不明であるが、確認した規模は延長 11.64 m、深さ 0.73 ～ 1.1 m である。幅は調査区の範囲である約 1.4 m 以上と推定され、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積は 9 層に分かれ、上層はマンガンを含むシルトで、下層は自然堆積層と考えられる灰色のシルトである。遺物は上層から中層に集中しており、弥生土器の壺 (29 ～ 32)、甕 (33 ～ 37)、高坏 (38・39)、蓋 (40)、石製品 (41・42) が出土している。



第 11 図 自然流路 92

第3節 出土遺物

(1) 平安時代後期から鎌倉時代の遺物

(1～16)は溝33から出土した。上層から集中して出土しているが、埋土中から出土した遺物と大きな時期差はないと判断される。(1・2)は土師器皿で、(1)は底部内外面とも指押えとナデにより整えられ、口縁部は1段のヨコナデによって整えられている。(2)は底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がり、内面は炭素が吸着している。(3～5)は土師器小皿で、(3)は白色系の胎土である。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、器壁は薄く、器高は低い。(4)は白色系の胎土である。全体的に粗雑な作りで不製形である。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、器壁は厚く、端部は丸く納まる。(5)は赤色系の胎土である。口縁部は外方に立ち上がり、器壁は薄く、器高は低い。(6・7)は瓦器小皿である。(6)は底部から口縁部にかけて緩やかに外方に立ち上がり、口縁端部は丸く納まる。炭素の吸着は不十分である。(7)は粗雑な作りで不製形である。口縁部はやや内傾ぎみに立ち上がり、端部は丸く納まる。(8～13)は瓦器碗で、いずれも13世紀後半のものと考えられる。(8)は紐状に退化した低い貼り付け高台をもつ。体部内面には平行状の暗文がみられる。見込み部は磨滅しており、炭素の吸着は不十分である。(9)は紐状の貼り付け高台痕が残る。器壁は薄く、器高は低い。(10)は紐状の低い貼り付け高台をもつ。体部内面はナデ調整後ミガキが施され、平行状の暗文がみられる。外面は指押えとナデなどにより2段の凹凸をもち、口縁端部は丸く納まる。(11)は紐状の低い貼り付け高台をもつ。外面はヨコナデにより1段の凹凸をもち、器高は低い。炭素の吸着は不十分である。(12)の体部内面は平行状の暗文がみられる。(13)は紐状の低い貼り付け高台をもつ。体部内面には重ねて焼成された際についたと思われる、上位碗の高台部によってつけられた炭素未吸着部がみられる。外面はヨコナデによる2段の凹凸をもつ。炭素吸着は不十分である。(14～16)は土釜である。(14)は口縁部で、頸部で「く」の字形に折れ曲がり、口縁端部に面をもつ。(15・16)はいずれも形骸化した鏝部をもち、時期は13世紀後半と考えられる。(17)は柱列1の柱穴63から出土した、瓦器小皿である。粗雑な作りで不製形であり、口縁部は外方に立ち上がる。器高は低い。(18・19)は土坑12から出土した、土師器小皿である。(18)は白色系の胎土で、口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。(19)はやや赤みを帯びた胎土で、口縁部は上位でやや外方に折れ曲がり、器高は低い。(20～22)はピット40から出土した。(20)は土師器皿である。(21・22)は瓦器碗の口縁部である。(21)の内面はナデ後ミガキが施され、端部は丸く納まり、器壁は厚い。(22)の端部はやや内傾する面をもち、器壁は薄い。(23)は溝67から出土した、瓦器碗である。逆三角形から逆台形の貼り付け高台をもつ。2次焼成を受け赤みをおびており、調整は磨滅のため不明瞭である。(24～27)は溝79から出土した。時期は12世紀後半と考えられる。(24)は土師器皿である。底部は回転糸切りで、口縁部は3、4段の回転ナデによって整えられている。(25)は土師器小皿である。赤橙色の胎土であり、底部は回転糸切り、口縁部は外方に立ち上がり、器壁は厚い。(27)は瓦器碗である。逆台形の貼り付け高台をもつ。見込み部に連結輪状、体部に平行状の暗文が施されている。(28)は土坑81から出土した、土師器皿である。

(2) 弥生時代の遺物

(29～42)は自然流路92から出土した。(36・37・39)は中期後葉から後期前葉、それ以外

は後期中葉に相当する。(29～31)は壺口縁部である。(29・30)はいずれも磨滅により調整は不明瞭であるが、垂下部に竹管文をもつ。(32・33)は壺底部で、どちらも上げ底状の突出する底部である。(32)は安定を図るため、底部外面に粘土帯を付加し、ナデ調整を施している。(33)は短頸壺であると考えられる。(34～37)は甕底部である。(35)は突出する底部に粘土帯を付加し、上げ底状としている。(38・39)は高坏脚部である。(38)は直線的に開く脚柱部である。穿孔は上位に3個、下位に上位と互い違いに3個穿かれていたと推定される。(39)は逆漏斗状に開く脚柱部である。穿孔は4個と推定される。(40)は広がる裾部をもつ蓋である。左右対称に穿孔が2個ずつと推定される。(41)はサヌカイト製のスクレイパーで重量は30.30g、(42)は砂岩の叩石で重量は719.41gである。

(3) 包含層から出土した遺物

(43)は低い逆三角形の貼り付け高台をもつ瓦器碗である。見込み部に連結輪状、体部に平行状の暗文が施されている。(44)は青磁碗である。両面とも施釉が雑で露体部があり、陰刻文が施されている。14世紀頃と考えられる。

第6章 まとめ

今回の調査対象地は田屋遺跡の北西隅に位置する。遺構は中央から南側にかけての微低地の平坦面に集中しており、北側の微高地から微低地への緩やかな傾斜部では希薄であった。第1遺構面、第2遺構面で多数検出された遺構は、大きな時期差は無く、弥生時代の自然流路を除き平安時代後期から鎌倉時代に相当すると考えられる。

鎌倉時代を中心とする遺構には、溝や井戸状遺構、柱列など周辺に集落が形成されていると推測できる要素が多数検出されている。検出された溝はほぼ東西方向と南北方向に軸をもち、掘削深度も比較的浅いため、用水の他、区画に利用された可能性も考えられる。また、溝33の最上層及び、調査区の中央の広い範囲にみられる土坑、ピットから多量の炭化物、焼土塊を含む埋土が検出されていることから、当時期の集落の廃絶は火災によるものである可能性も考えられる。

弥生時代の遺構は調査区の中央南側で検出された自然流路92のみである。また、調査区内に同時期の遺構は検出されず、弥生時代の遺物を含む包含層も確認されていない。水の流れは、周辺の地形から、北から南方向へ流れていたと考えられるため、上流と推測される調査地北側及び周辺に遺構が展開していると考えられる。

調査地に接して南側には、古くから知られる六箇井用水が流れている。本調査前の試掘調査の結果から、周辺の用水路南側及び下流では遺構は検出されていない。既往の調査では、本調査地の南東約500mの調査地において、弥生時代後期から古墳時代の自然流路が検出されているため、六箇井用水に先立つ水の流れが古くから周辺に存在していたことを窺うことが出来る。また、鎌倉時代の遺構が多数検出されたことにより、同時期において現在の位置に用水路が存在していたとは考えにくい。古くから存在していたと言われている六箇井用水は各時代で流れを変化させながら、江戸時代に測量される頃、現在の場所に位置していたと考えられる。

溝 33



1



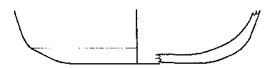
3



4

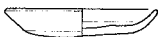


5

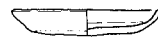


2

放射状の圧痕



6



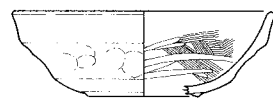
7



8



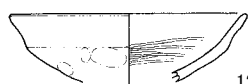
9



10



11



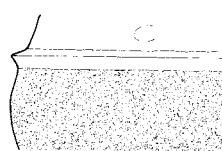
12



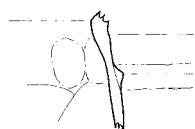
13



14



15



16

柱穴 63



17

土杭 12



18



19

ピット 40



20



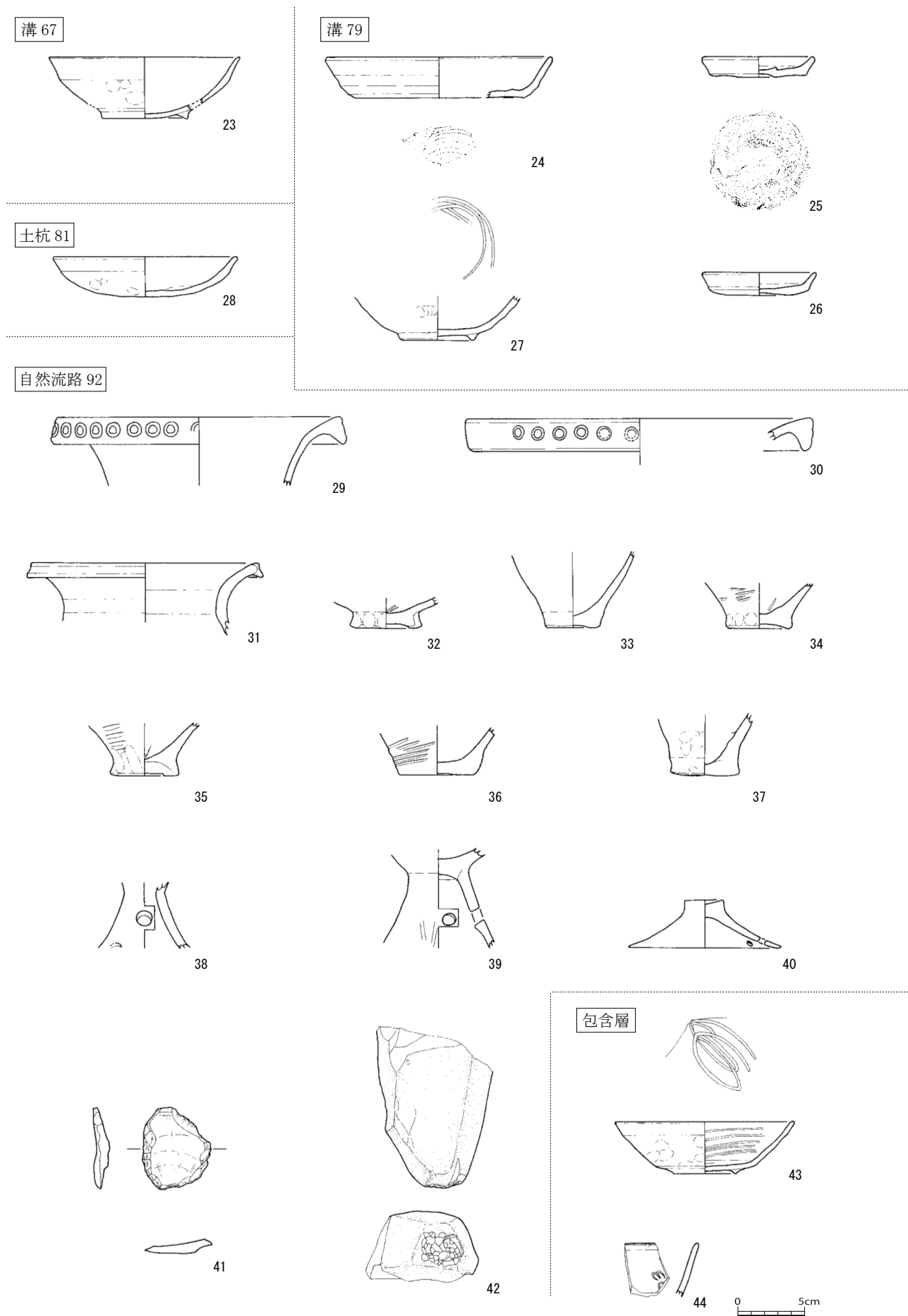
21



22



第 12 図 出土遺物実測図 (1)



第 13 図 出土遺物実測図 (2)

出土遺物観察表

掲載 番号	登録 番号	遺構 層位	種類	器種	法 量 (cm)			残存率	胎土	色調	技法・形態の特徴など	時期
					口径	底部径	器高					
1	91	33 上層	土師器	皿	13.3	2.7	12.0	70%	普通、2mm以下の赤色酸化粒少量	内・外・断：浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内：指押え、ナデ 外・底部：指押え、ナデ 口縁部：内外面ともヨコナデ	鎌倉時代
2	95	33 上層	土師器	皿	—	(11.2)	残 2.8	15% (底部 25%)	密、1mm以下の赤色酸化粒微量	内：褐灰色 (7.5YR4/1) 外：浅黄橙色 (7.5YR8/3) 褐灰色 (7.5YR5/1) 断：浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内：ナデ 外・底部：ナデ 口縁部：内外面ともヨコナデ	鎌倉時代
3	81	33 上層	土師器	小皿	7.7	6.8	1.4	100%	密、3mm以下の石微量、蓋含む	内・外：浅黄橙色 (10YR8/4)	内：ナデ 外・底部：指押え、ナデ	鎌倉時代
4	100	33 上層	土師器	小皿	8.4	7.2	1.9	90%	普通 1m 以下の石少量含む	内・外・断：灰白色 (2.5YR8/2)	内：指押え？、ナデ 外・底部：ナデ 口縁部：内外面ともヨコナデ	鎌倉時代
5	81	33 上層	土師器	小皿	8.0	6.6	1.3	80%	密	内・外：浅黄橙色 (7.5YR8/6) 断：灰白色 (10YR8/2)	内：ナデ？ 外・底部：指押え、ナデ 口縁部：内外面ともヨコナデ	鎌倉時代
6	96	33 上層	瓦器	小皿	8.1	5.4	1.5	100%	密、1～5mmの白石少量	内・外：灰白色 (N8/) ～灰色 (N4/) 断：灰白色 (N8/)	内：指押え、ナデ、放射状圧痕 外・底部：ナデ 口縁部：内外面ともヨコナデ	鎌倉時代
7	63	33 上層	瓦器	小皿	7.7	5.8	1.3	90%	緻密	内・外：灰色 (N5/) 断：灰白色 (N7/)	内：ナデ 外・底部：指押え、ナデ 口縁部：内外面ともヨコナデ	鎌倉時代
8	90	33 上層	瓦器	椀	14.6	4.4	4.8	80%	密、5mm以下の赤色酸化粒少量	内・断：灰白色 (N7/) 外：灰色 (N6/)	内：ヘラミガキ、同心円状の暗文、見込み部：指押え、ナデ 外：指押え、ナデ 口縁部：内外面ともヨコナデ	鎌倉時代
9	92	33 上層	瓦器	椀	(14.8)	—	残 3.4	40%	密、1～5mmの白石微量	内・外：暗灰色 (N3/) 断：灰白色 (N8/)	内：ナデのち磨き？暗文 外面：指押さえ、ナデ 口縁部：ナデ	鎌倉時代
10	93	33 上層	瓦器	椀	(13.6)	(6.0)	残 4.5	20%	緻密、蓋含む	内：灰白色 (N8/) ～灰色 (N4/) 外：灰色 (N4/) 断：灰白色 (N8/)	内：ナデのち粗いヘラ磨き、暗文 外：指押さえ、ナデ 口縁部：内外面ともヨコナデ	鎌倉時代
11	94	33 上層	瓦器	椀	(12.8)	3.4	3.6	40%	密、3mmのチャート微量	内・断：灰白色 (5Y8/1) 外：灰白色 (N8/) ～浅黄橙色 (10YR8/3)	内：ナデ？ 外：指押え、ナデ	鎌倉時代
12	95	33 上層	瓦器	椀	(12.4)	—	残 3.5	30% (口縁部 40%)	密、1～3mm石少量	内：灰白 (N7/) ～灰色 (N4/) 外：灰色 (N4/) 断：灰白色 (2.5Y8/2)	内：ヘラミガキ・平行線状の暗文 外：指押さえ、ナデ 口縁部：ナデ	鎌倉時代
13	63	33 上層	瓦器	椀	(14.0)	(3.3)	4.0	40%	密、1～5mmの灰石微量	内・外：灰白色 (5Y8/1) 灰色 (N5/) 断：灰白色 (5Y8/1)	内：重ね焼の痕跡？ 外：指押え、ナデ 口縁部：ヨコナデ	鎌倉時代
14	63	33 上層	土師器	土釜 (口縁部)	(27.7)	—	残 4.1	口縁部 15%	密、3mm以下の石英・チャート多量	内：にぶい黄褐色 (10YR7/3) 外：にぶい褐色 (7.5YR5/3) 断：にぶい褐色 (7.5YR6/4)	内：ヨコナデ、ナデ、指押え 外：指押え、ナデ	鎌倉時代
15	63	33 上層	土師器	土釜 (鈐部)	—	—	残 7.4	10% 未満	密、1mmの石英・チャート多量	内：灰黄色 (2.5Y7/2) 外：橙色 (5YR6/6) 断：浅黄褐色 (2.5Y7/3)	内：ヘラミガキ 外：ヨコナデ、ナデ	鎌倉時代
16	64	33 上層	土師器	土釜 (鈐部)	—	—	残 6.4	10% 未満	密、1mm以下の石英・チャート中量	内・外：にぶい褐色 (5YR6/4) 断：にぶい黄褐色 (10YR7/2)	内：指押え、ナデ？ 外：ヨコナデ、ナデ	鎌倉時代
17	123	63	瓦器	小皿	8.2	7.2	1.3	100%	緻密、1mm以下の白石中量	内・外：灰色 (N5/)	内：ナデ 外・底部：ナデ	鎌倉時代
18	74	12	土師器	小皿	(7.8)	7.2	1.6	50%	密、1mm以下の白石少量	内・外・断：浅黄褐色 (10YR8/3)	内：指押え、ナデ 外・底部：指押え、ナデ	鎌倉時代
19	75	12	土師器	小皿	(8.4)	(7.4)	1.35	50%	密、2mm以下の赤色酸化粒少量	内：浅黄褐色 (10YR8/3) 外・断：浅黄褐色 (7.5YR8/4)	内：ナデ 外・底部：指押え、ナデ	鎌倉時代
20	50	40	土師器	皿	(12.6)	(8.5)	2.9	15%	密、1mm以下の赤色酸化粒少量	内：浅黄褐色 (7.5YR8/6) 外：浅黄褐色 (7.5YR8/4) 断：灰白色 (N8/) 浅黄褐色 (7.5YR8/4)	内：指押え、ナデ 外：指押え、ナデ 口縁部：内外面ともヨコナデ	鎌倉時代
21	50	40	瓦器	椀	(16.2)	—	残 4.2	10% 未満	密	内：灰白色 (N8/) ～灰色 (N4/) 外・断：灰白色 (N8/)	内：ナデ、ミガキ 外：指押え、ナデ 口縁部：内外面ともヨコナデ	鎌倉時代
22	50	40	瓦器	椀	(15.2)	—	残 3.1	10% 未満	緻密、2mm以下の石微量	内：灰白色 (N7/) 外：灰色 (N6/) 断：灰白色 (N8/)	内：ミガキ、平行暗文 外指押え、ナデ 口縁部：内外面ともヨコナデ	鎌倉時代
23	107	67	瓦器	椀	(14.2)	6.4	(4.6)	25% (底部 90%)	密、1mm以下の石多量	内：灰白色 (10YR8/1) にぶい黄褐色 (10YR6/3) 外：浅黄褐色 (10YR8/4) 淡赤褐色 (2.5YR7/4) 断：灰白色 (10YR8/2)	外：指押え 口縁部：ナデ	鎌倉時代
24	115	79	土師器	皿	(16.6)	(12.6)	3.0	10%	緻密	内：暗赤灰色 (2.5YR3/1) 外・断：明赤褐色 (2.5YR5/6)	内：整形時の回転ナデ 外・底部：回転糸切り痕 口縁部：内外面とも回転ナデ	平安時代後期 ～鎌倉時代
25	115	79	土師器	小皿	8.0	7.3	1.5	80%	緻密、4mm以下の赤色酸化物多量	内・断：赤褐色 (10R6/6) 外：橙色 (2.5YR7/8)	内：整形時の回転ナデ 外・底部：回転糸切り痕 口縁部：ヨコナデ？	平安時代後期 ～鎌倉時代
26	115	79	瓦器	小皿	8.4	7.6	1.7	50%	密、2mm以下の白石少量	内・外：灰色 (N5/) 断：灰白色 (N7/)	内：ナデ、放射状圧痕 外・底部：指押え、ナデ 口縁部：内外面ともヨコナデ	鎌倉時代
27	115	79	瓦器	椀	—	3.4	残 5.6	30%	密、1～4mmの片岩微量、1mmの赤色酸化粒微量	内・外・断：暗灰色 (N3/) 断：灰白色 (5Y7/1)	内：ヘラミガキ、見込み部：渦巻き状の暗文 外：指押え、ナデ	平安時代後期 ～鎌倉時代
28	117	81	土師器	皿	(13.6)	10.6	3.0	75%	密 多量に砂粒含む	内・外：浅黄褐色 (7.5YR8/3) 断：浅黄褐色 (7.5YR8/4)	内・外：指押え、ナデ 口縁部：ヨコナデ	鎌倉時代
29	128	92 上～中層	弥生土器	壺 (口縁部)	(21.0)	—	(5.1)	口縁部 20%	密、2mm以下の石英中量	内・断：褐色 (5YR7/8) 褐灰色 (7.5YR5/1) 外：褐色 (5YR 7/8)	内：ナデ 外：ナデ？ 垂下部に竹管文	弥生時代 後期中葉
30	133	92	弥生土器	壺 (口縁部)	(25.6)	—	残 2.4	口縁部 15%	密、3mm以下の石英少量	内・外：褐色 (7.5YR6/6) 断：明赤褐色 (5YR5/6)	口縁部：ナデ？垂下部に竹管文	弥生時代 後期中葉
31	133	92	弥生土器	壺 (口縁部)	(17.0)	—	残 4.4	口縁部 20%	緻密、2～5mmの石英、5mm以下の赤色酸化粒少量	内・断：褐色 (5Y6/6) 外：灰白色 (10YR7/1) ～にぶい黄褐色 (10YR7/2)	口縁部：強いヨコナデ 内・頸部：ナデ、体部：指押え、ナデ	弥生時代 後期中葉
32	127	92 上～中層	弥生土器	壺 (底部)	—	5.4	残 2.3	10% 未満 (底部 70%)	緻密、2mm以下の石英・赤色酸化粒少量	内：灰白色 (10YR8/2) 外・断：明赤褐色 (5YR5/6)	内：ヘラミガキ、ナデ 外：指押え、ナデ	弥生時代 後期中葉
33	133	92	弥生土器	壺 (底部)	—	(4.1)	残 5.7	10% 未満 (底部 50%)	緻密、1～2mmの石英少量	内・外：褐色 (7.5YR6/6) 断：褐色 (7.5YR6/6) 黒褐色 (10YR3/1)	内：ナデ 外：ナデ	弥生時代 後期中葉
34	131	92 上層	弥生土器	壺 (底部)	—	4.6	残 3.4	10% 未満 (底部 100%)	密、3mm以下の石英中量、チャート少量	内・断：褐色 (5YR6/6) 外：黒色 (N2/) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	内：ヘラミガキ 外・体部：タタキ、底部：指押え	弥生時代 後期中葉
35	134	92	弥生土器	壺 (底部)	—	4.0	残 5.1	10% 未満 (底部 40%)	密、4mm以下の赤色酸化粒少量	内・外：にぶい黄褐色 (10YR7/2) 断：褐色 (5YR6/6)	内：板状工具によるナデ 外・体部：タタキ、底部：指押え	弥生時代 後期中葉
36	134	92 中～下層	弥生土器	壺 (底部)	—	5.6	残 3.6	10% 未満 (底部 95%)	密、5mm以下の石英・チャート中量、3mm以下の赤色酸化粒少量	内・外：褐色 (5YR6/6) 断：褐色 (5YR6/6)	内：ナデ？ 外：体部・タタキ、底部：ナデ	弥生時代 後期前葉
37	134	92	弥生土器	壺 (底部)	—	—	残 4.6	10% 未満 (底部 100%)	緻密、10mm以下の石英中量	内：明赤褐色 (5YR5/6) 外・断：明赤褐色 (5YR5/8)	内：ナデ 外：指押え、底部：ナデ	弥生時代 後期前葉
38	134	92	弥生土器	高坏 (脚柱部)	—	脚柱部 3.0	(5.0)	40%	緻密、1mm以下の赤色酸化粒多量	内・外・断：明赤褐色 (5YR5/6)	内：ナデ 外：ミガキ 脚柱部上方に穿孔3個、互い違いに下方に3個？	弥生時代 後期中葉
39	134	92 中～下層	弥生土器	高坏 (脚柱部)	—	—	残 7.6	60%	密、2mm以下の石英・チャート中量、片岩少量	内：明赤褐色 (5YR5/6) 外：にぶい褐色 (7.5YR7/4) ～明赤褐色 (5YR5/6) 断：明赤褐色 (5YR5/6)	杯底部：ヘラミガキ？ 外：ヘラミガキ？ 脚部内：ナデ 穿孔4個(残存2個)	弥生時代 後期前葉
40	135	92 下層	弥生土器	蓋	摘み部 2.8	裾部 (11.4)	3.6	45%	密、2mm以下の石英中量	内・外：褐色 (7.5YR6/6) 断：褐灰色 (7.5YR6/1)	裾部下位に左右対称に穿孔4個(残存2個)	弥生時代 後期中葉
41	134	92	サヌカイト	スクレイパー	長 6.1	幅 5.0	厚み 1.1	100%		灰色 (N5/)		弥生時代
42	135	92	砂岩	叩石	長 11.2	幅 残 8.5	厚み 残 5.2	—		灰色 (N5/)		弥生時代
43	72	包含層	瓦器	椀	(13.2)	4.6	3.9	40%	緻密、1mm以下の白石微量	内・外：灰白色 (N8/) ～灰色 (N6/) 断：灰白色 (N8/)	内：ヘラミガキ、同心円状の暗文 外：指押え、ナデ 口縁部：内外面ともヨコナデ	鎌倉時代
44	15	包含層	青磁	椀	—	—	残 4.0	10% 未満	密	内・外：明緑灰色 (7.5GY7/1) 断：灰白色 (N8/)	内：陰刻文	中世

調査前状況
西から



第1遺構面
中央部全景
北東から



第1遺構面
溝33上層
遺物出土状況
北から



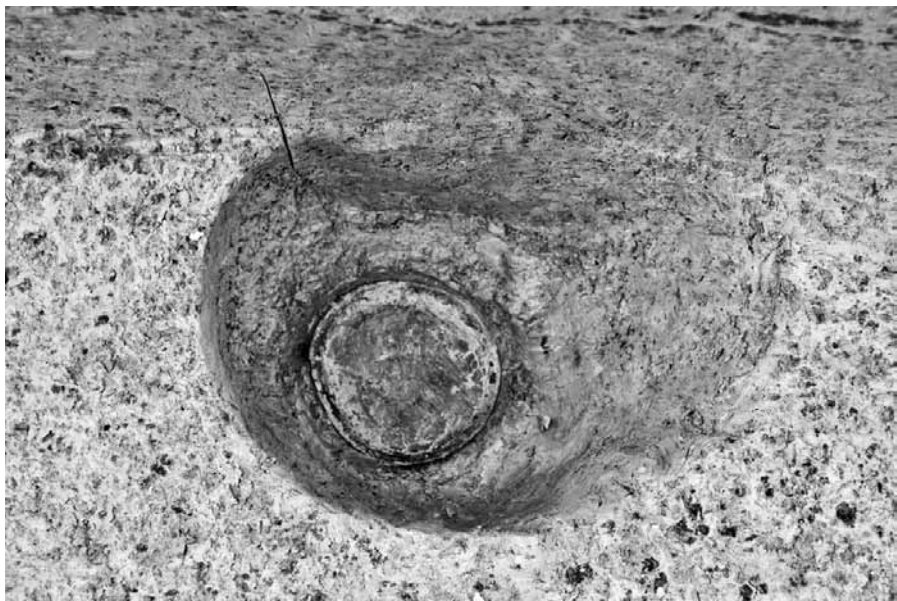
第1 遺構面
溝33
完掘状況
南から



第1 遺構面
柱列1
南から



第1 遺構面
柱穴63
遺物出土状況
東から



第2遺構面
南側全景
北から



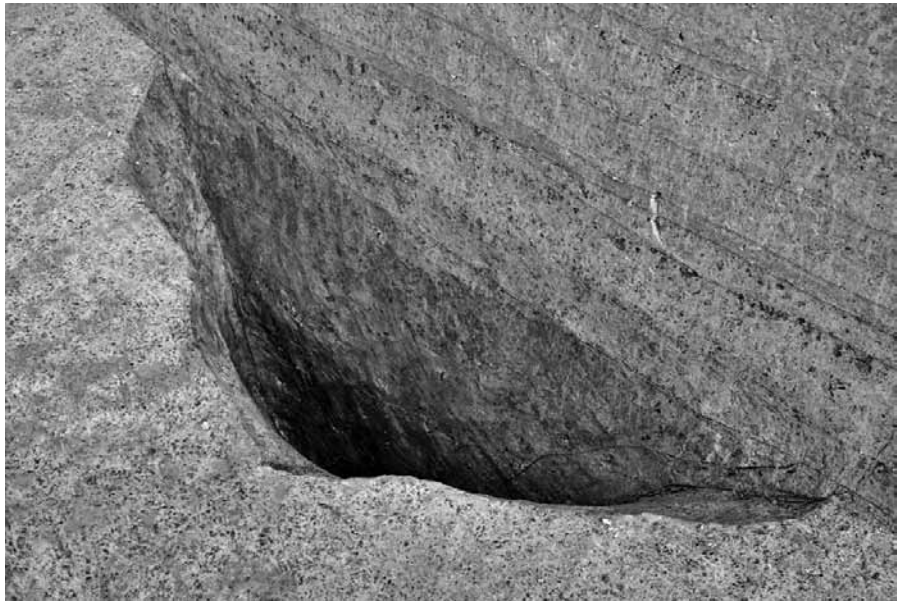
第2遺構面
溝36
北から



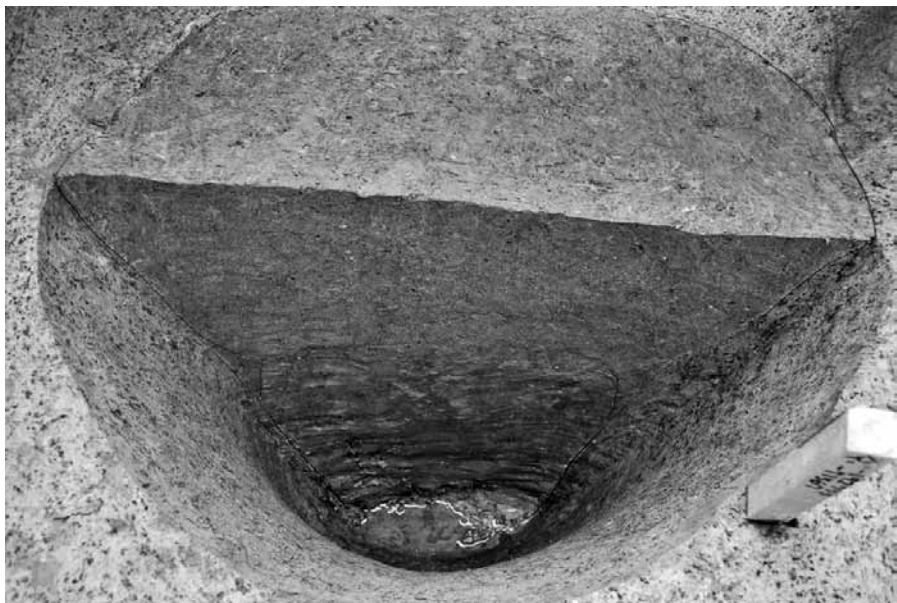
第2遺構面
溝76・77・78
南から



第2遺構面
井戸状遺構70
南西から

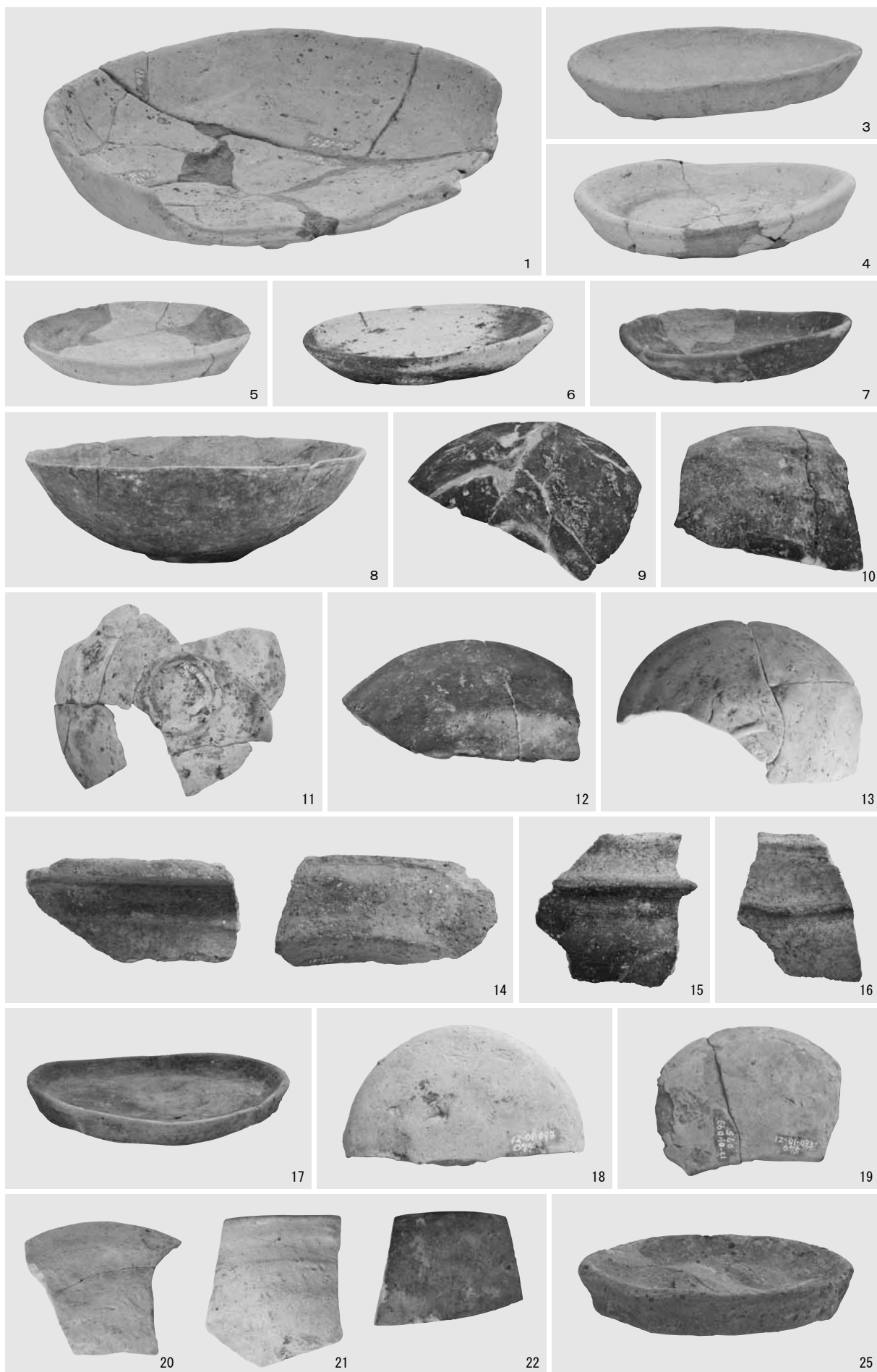


第2遺構面
井戸状遺構88
北から



第2遺構面
自然流路92
南西から







26



27



28



29



30



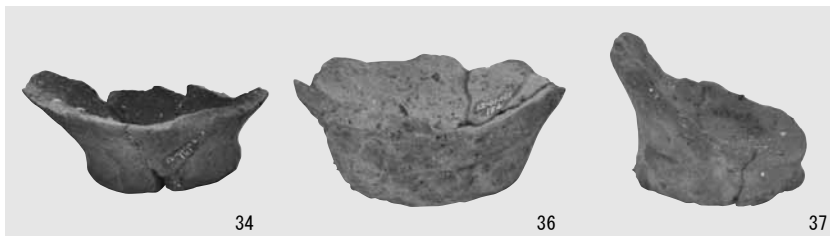
31



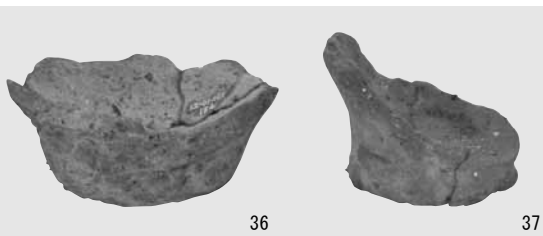
32



35



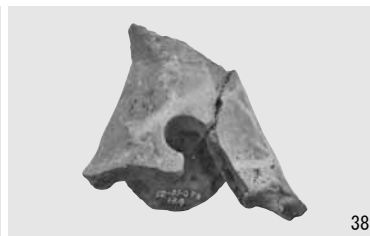
34



36



37



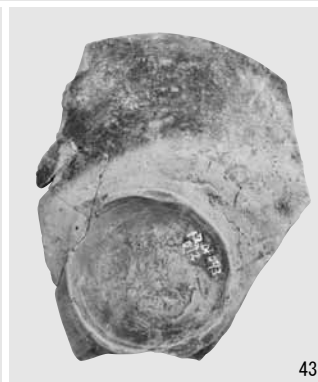
38



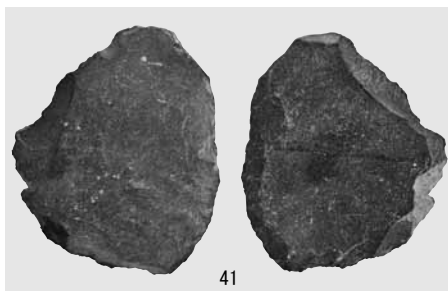
39



40



43



41



42



44

報告書抄録

ふりがな	たやいせき							
書名	田屋遺跡							
副書名	大和紀伊平野農業水利事業に伴う発掘調査報告書							
編著者名	森原 聖							
編集機関	公益財団法人和歌山県文化財センター							
所在地	〒 640-8404 和歌山県和歌山市湊 571 番 1 TEL 073-433-3843							
発行年月日	西暦 2013 年 2 月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たやいせき 田屋遺跡	わかやまし 和歌山市 たや 田屋	30201	093	34° 15′ 37″	135° 13′ 23″	2012 年 11 月 2 日 ～ 11 月 30 日	333 m ²	大和紀伊 平野農業 水利事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
田屋遺跡	集落	弥生		自然流路		弥生土器	特になし	
		中世		溝・柱列		土師器・瓦器		
要約	田屋遺跡の発掘調査を行った。第 1 遺構面、第 2 遺構面で中世の溝 7 条、柱列 1 列、井戸状遺構 2 基等を検出した。出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代に帰属すると考えられる。調査区中央から南にかけて多くの遺構を検出しており、中世の集落が周辺に形成されていたと推測される。また、第 2 遺構面の調査区中央南側で弥生時代の自然流路を検出した。調査地の東側には古くから知られる六箇井用水があり、それに先立つ水の流れが古くから存在していた可能性が考えられる。							

田屋遺跡

－大和紀伊平野農業水利事業に伴う発掘調査報告書－

2013 年 2 月

編集・発行 （公財）和歌山県文化財センター

印刷・製本 株式会社 協 和